第三講　「逆説」の読解②

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、文章は一部改変したところがあります。

人は、サイエンス・フィクションという名称のもとに、一群の奇妙な文学、際限もなく荒唐無稽な、まともに研究しようと取り組んだが最後、どのようにも収拾しがたい泥沼へとひきずりこまれてしまいそうなある種の文学を、とりあえずは封じ込めることに成功しているように見える。がしかし、それはあくまでもとりあえずでしかない。封じ込められた内側には、すべてのフィクションはついにサイエンス・フィクションであるとでもいいかねない凶暴な嵐が吹き荒れているのであり、実際それを論駁（ろんばく）しつくすのはほとんど不可能に近い。サイエンスもそしてフィクションも容易に定義しえない状況のもとで、どうしてサイエンス・フィクションを定義しえようか。

たとえばロジェ・カイヨワでさえも、それを論じようとするときは次のような(1)リュウホを付している。

　次にサイエンス・フィクションについて考えてみよう。ただし、星間戦争や星間旅行をテーマにした単純かつ幼稚な小説の域をこえ得たものに限る。その限りで、サイエンス・フィクションのあつかう不可思議とは、かならずしも科学上のデータと矛盾するものではなく、むしろ、科学の権能についての考察、とりわけ、科学が出会うさまざまな難問についての考察に由来するものなのだ。（『妖精物語からＳＦへ』）

カイヨワはここで、単純かつ幼稚な小説とそうでないものを截然（せつぜん）と二分している。そしてこの二分法は、それが科学を真剣に考察しているか、あるいは、ただ単にどのような不可能をも可能にする魔法の杖のようなものとして利用しているに過ぎないか、によっている。すなわち、(a)科学と文学の礼儀正しい交流とでもいうべきものを想定することによって、カイヨワは、あの収拾しがたい泥沼を(2)カイヒしようとしているのである。

　しかし、はたしてこの二分法は正当なものだろうか。星間戦争や星間旅行をテーマにしていたとしても単純かつ幼稚な小説であるとはかぎらないし、科学上のデータに矛盾せず、科学に課せられたパラドックスやアポリアを真剣に考察していたとしても、それがそのまますぐれた小説であるとはかぎらない。カイヨワの矛盾は、小説の(3)コウセツを、その科学に対す

る態度と連結させたところにあるといってよいが、しかし問題はそれにとどまらない。

　おそらくこの矛盾は、科学と文学を対比しうる二つの領域として切り離し、しかもそのうえで、文学が遠慮がちに科学の成果を採りいれようとしているかのように事態を見做(みな)している態度そのものに起因しているのである。カイヨワは、少なくともこの場面においては、科学の思い上がりを全面的に肯定しているのだ。文学はむしろ科学にかしずいている。

　ここにはひとつの錯誤がある。そしてこの錯誤は、サイエンス・フィクションという名称そのものに由来しているのではないか。

　サイエンス・フィクションという名称は、その名称に先立ってサイエンスとフィクションとがすでに存在していることを物語っている。そして、近代科学の展開によって惹(ひ)き起こされた文芸上の新しいジャンルとしてサイエンス・フィクションが成立したということを、ほとんど自明のこととして人におしつけようとする。

　しかし、もしもサイエンスそのものがある種のフィクションによって成立したとすれば、この自明と思われていた事実は転倒されなければならない。逆に、サイエンス・フィクションこそがじつはサイエンスを生みだしたのだ、と。この一見異様に思える逆説は、しかし、一考に価する。

たとえば、村上陽一郎はその『西欧近代科学』の終章で次のように述べている。

　神の理性に対する信頼は、意識的と無意識的とを問わず、近代科学を外から束縛する基本姿勢と言えるだろう。「現代の」われわれは、コペルニクスが、一つには、「神の支配が、簡潔に果たされる」ことに対する信頼から、より周転円の数が少なくてすむ太陽中心説を持った、ということに対して、それを真面目に扱おうとはしない。ケプラーが、世界が、数的調和のなかにある、という「神秘的」思想に基づいて、惑星運動についての第三法則を導いたことも、「現代の」われわれにとっては奇妙かつ科学にあるまじき「神秘主義」的発想と断ずる。けれども、われわれ自身に、そのような「科学外」からくる何ものかへの信頼がないであろうか。

近代科学は科学的に発生し展開してきたのではない。むしろ科学外のある種のフィクション、神学であれ形而上学であれある種のフィクションにかかわることによって成立したのである。宇宙成立をめぐる神話はフィクションに過ぎない。歴史的に成立してきたほとんどの宇宙論もまたフィク

ションに過ぎない。ただ現実的に人々を動かすことができるかどうかだけが、それらとサイエンス・フィクションとを分かつに過ぎないのである。そして、これらの(b)フィクションの枠組を借り、それを内側から食い破ることによって成立したのが科学なのだ。内側から食い破る情熱もまたフィクションによって与えられたと考えるべきだろう。［……中略……］

　サイエンスがサイエンス・フィクションを生んだのではない。むしろサイエンス・フィクションがサイエンスを生んだのだという先の逆説は、こうして順説よりもはるかに切実な響きを帯びて現代の人間に迫ってくるといえるだろう。少なくとも、科学が夥(おびただ)しい非科学を身にまとい、それによって息づいていることは事実なのだ。

　とすれば、フィクションがサイエンスの根本的な問題を問いつめようとするのは、あまりにも当然なことではないか。それらは互いに惹きあう二つの領域などというものではない。フィクションがサイエンスの(4)コウリユウに無関心であることができないのは、まさに後者が前者の(5)チャクシにほかならないからである。それらはそれら自身において密接に結びついているのだ。

　事実、文学はつねに、科学がその起源を忘却しないように執拗(しつよう)に科学の周辺をとりかこみつづけてきた。そして、それがそのままサイエンス・フ

ィクションの歴史であるといって過言ではない。シェリー夫人の『フランケンシュタイン』においても、スティーヴンスンの『ジキル博士とハイド氏』においても、主人公は科学者である。ゲーテの『ファウスト』を典型とする一連のファウスト文学の例を挙げてもよい。これらの文学のなかで、科学者はつねに科学の起源の位置に立っている。フィクションへの情熱によって滅ぼされる科学者をめぐるこれらのフィクションは、フィクションによって形成された科学への反省でなくてなんであろうか。科学者たちはつねにアイデンティティの危機に身をさらす存在として描かれてきたのである。この科学者の背後に近代のディレンマを透かし見ることはたやすい。それは、なにかを創造しようとするものすべてを襲うディレンマなのであり、近代においてよりいっそう顕著になったディレンマである。近代において人間は、まずなによりも自分自身をつくろうとする存在であろうとしはじめた。こうしてつくるものとしての自己とつくられるものとしての自己との分裂が目に見えて進行しはじめる。ジキルとハイドの悲劇が一般化するのだ。

　極論を怖(おそ)れなければ、自己が自己であるということにかかわること、人間が人間であるということにかかわること、このことの意味と無意味をさまざまなかたちで問題にしてきたのがサイエンス・フィクションであった

といってよい。むしろ、これこそがあらゆるサイエンス・フィクションの隠されたテーマだったのではないか。

言うまでもなく、このテーマは、西洋の神学や形而上学に起因している。(c)絶対者と自己との関係は、そのまま自己と自己との関係であり、そしてこの関係を可視的にしようとしたときに、人間はおそらく人造人間のテーマに遭遇したのである。

（三浦雅士『私という現象』による）

問一　傍線部(1)〜(5)を漢字になおしなさい。

問二　傍線部(a)は、どのようなことをいうのか、わかりやすく説明しなさい。

問三　傍線部(b)は、どのようなことをいうのか、わかりやすく説明しなさい。

問四　傍線部(c)で、「絶対者と自己との関係」が「人造人間のテーマ」に結びつくのはなぜか、わかりやすく説明しなさい。

（次ページより解答欄）

問一

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

問二

問三

問四

第三講 「逆説」の読解②

問一

(4)	(2)	(3)	(4)	(5)
留保	回避	巧拙	興隆	嫡子

問二

科学と文学を対比しうる二つの領域として切り離し、しかも文学が科学の優位性を全面的に肯定したうえで、科学上のデータに矛盾することなく科学の機能について、とりわけ科学が出会う難問について真剣に考察している状態のこと。

問三

神学や形而上学といった科学外の虚構における、神の理性に対する信頼によって、理性的でない虚構を否定する情熱が科学者にもたらされ、近代科学が成立したということ。

問四

西洋の神学や形而上学といった虚構では神の理性が人間を創造したとしているが、近代になると神の理性に対する信頼が高じて科学が成立し、理性的な人間である科学者が創造する立場につくことになる。そして、科学者が人間を創造するという関係を可視化しようとすると、人造人間というテーマになるから。